

西行年譜

1144 藤原俊成 生る
1148 千道成 生る

元永元年（一一八）生まれ。父、佐藤左兵衛尉康清（檢非違使等）、母、監物源清経

の娘。

長承元年（一一三二）内舎人任官を申請。

保延元年（一一三五）十八歳。兵衛尉に任官。やがて鳥羽院の下北面に仕える。

徳大寺家の家人として、待賢門院~~璋子~~璋子・崇徳院とも親しが。

保延五年（一一三九）この頃、法輪寺に空仁を訪ねる。

保延六年（一一四〇）十月十五日、二十三歳、出家。

永治元年（一一四一）崇徳天皇讓位。

康治元年（一一四二）待賢門院出家。藤原頼長邸を訪ね、一品経書写を勸進。

久安元年（一一四五）待賢門院他界。

久安三年（一一四七）三十歳頃、陸奥へ修行の旅に出る。十月十二日平泉に到着。

久安四年（一一四八）三月、出羽の国に越え、晩秋、下野の国を経て帰京。

高野山中心の修行生活（『高野山大塔勸進』）

仁平元年（一一五一）『詞花和歌集』成立。一首入集（読人知らず）

保元元年（一一五六）七月、鳥羽院崩御。保元の乱起り、崇徳院敗れて仁和寺で出家。

讃岐に配流。

保元二年（一一五七）左大臣徳大寺実能没。

平治元年（一一五九）平治の乱起る。

永暦元年（一一六〇）美福門院得子没。

永暦二年（一一六一）右大臣徳大寺公能没。

長寛二年（一一六四）崇徳院、讃岐で崩御。

仁安三年（一一六八）十月十日、五十一歳、四国への修行の旅に出る。白峰、普通寺

参詣。（高倉天皇即位）

承安二年（一一七二）清盛に招かれ、和田浜の万灯会に際し、千僧供養に参列。

承安三年（一一七三）から翌年の頃、『山家集』原型自撰。（説に②国土を以て示）

治承元年（一一七七）鳥羽院皇女頼子内親王のために蓮華乘院を建立。西行~~勸進~~勸進に参加

治承四年（一一八〇）清盛と交渉し、日前宮造営に関する高野山の課役の免除を受け

る。（西行自筆書札現存）

六月以前、伊勢に移住。福原遷都。

寿永二年（一一八三）源通親、公卿勅使として伊勢に派遣。

元暦元年（一一八四）木曾義仲敗死。

文治元年（一一八五）平家、壇ノ浦に滅亡。

文治二年（一一八六）六十九歳、定家・家隆・密円・寂蓮らに一見浦百首を勸進。

初秋の頃、東大寺再建の勸進のために奥州下向。八月十五日、鎌倉で頼朝と面談。

文治三年（一一八七）春頃、京へ帰り、嵯峨の草庵に住む。『御裳濯川歌合』成立。

文治四年（一一八八）『千載和歌集』成立、十八首入集（円位法師）。

文治五年（一一八九）『宮川歌合』成立。（『宮川歌合』成立。『三直宗西行自序書』花院存）

文治六年（一一九〇）二月十六日、七十三歳。河内の弘川寺で死去。

参 考 歌

惜しむとも惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ
鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかになりゆくわが身なるらむ
世の中を捨てて捨てえぬ心地して都はなれぬわが身なりけり
白河の関屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり
かかる世に影もかはらず澄む月を見るわが身さへうらめしきかな
かしまる幣に涙のかかるかなまたいつかはと思ふあはれに
ここをまたわれ住みうくてもうかれなば松はひとりにならむとすらむ
深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峰の松風
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山
風になびき富士の煙の空に消えてゆくも知らぬわが思ひかな
願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

陸奥への旅を中心に

みちのくにへ修行してまかりけるに、白川の關とまりて、とるがらにやねよりも月おもしろくおはれに、能因が秋かぜぞよく申しけむをりいつなりけむと思ひいでられて、なごりおほくおほえければ、關屋の柱にかきつけける

三三 さらかはのせきやを月のもるかはは人の心をどむるなりけり

關にりりて、信夫と申すわたり、あらぬ世のことにおほえておはれなり。都いでし日かぞおもひつづけられて、かすみともにと待ることの跡だどりまできにける心ひとつに思ひしられてよみける

三三 みやこいでてあふさかてえしをりまでは心かすめし白川のせき

武隈の松も打ちかしたりたりけれども、あとをだにとてみにまかりてよみける

三三 かれにける松なきおとにたけくまはみきといひてもかひなかるべし

ふりたるたなはしをもみぢのうつみたりける、わたりにくくてやすらはれて、人にたづねければおもはくの橋と申すはこれなりと申し

けるとききて

三三 ふままうきもみぢのにしきちりしきて人もかよはぬおもはくのはし

信夫の里より奥へ二日ばかりいりてある橋なり。

なとり河をわたりにけるに、きしのもみぢのかげをみて

三三 なとり河きしのもみぢのうつるかげはおほしにしきをそこにさへしく

十月十二日平泉にまかりつきたりけるに、ゆきふり、おらしはげしく、このほかにあれたりけり。いつしか衣河かまほしくてまかり向ひてみけり。河の岸につきて、衣河の城しまはしたることからやうかはりて物を思ふ心ちしけり。汀渡りてとりわききえければ

三三 とりわきて心もしみて済えぞわたる衣河みにきだるけふしも

又のとしの三月に出羽國にこえて、たきの山と申す山寺に待りけるに、きくらのつねよりもうすくれなるの色とき花になみだりけ

るを、てらの人々も鼻興じければ

三三 だぐひなきおもひいでばのさくらかなうすくれなるの花のにほひは

下野國にてしばのけぶりまみて

三三 みやこちかきむのおほはらと思ひ出づるしばのけぶりのおほはれなるかな

おなじだびにて

三三 かぞおらきしばの庵はつねよりもねぎめぞものはかなしかりける

〔三三〕夫木二十一日の歌は信夫の里より奥へ二日ばかり入りて古りたる橋あり、人に問へば思はくの橋と云ふ

修行してみちのくにまかりけるに、白河関にて月
のあかく侍りければ、関屋の柱に書付け侍りける

西行法師

(二五三) 西行三十八歳から三十九歳、
問に成立

陸奥国に下りけるに、白河の関にてよみ侍りける 能因法師

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関能因法師『後拾遺集』攝旅

能因集では百首三十一 三十八歳時

竹田大夫国行と云ふ者、陸奥に下向の時、白河の関過ぐる日装束を殊にし、みづびん

かくと云々。人間ひて云はく、何等の故ぞや。答へて云はく、古會部入道能因の、

「秋風ぞ吹く白河の関」とよまれたる所をば、争かけなりにては過ぎむと云々。殊勝

の事か。

能因実には陸奥に下向せず、此歌を詠まむが為に竊に籠居して奥州に下向の由風聞すと

云々。二度下向の由ありて、一度においては実か。八十島記を書けり。『登壇紙』雜談

一五九年成立

陸奥の国に行き着きて、信夫の郡にて、早う見し人

を尋ねれば、その人はなくなりにきといへば

浅茅原荒れたる野へはむかし見し人をしのぶのわたりなりけり

能因集『後拾遺集』雜一にも

武隈の松、はじめのたびは枯れながらも枵うなどはあ

りき、このたびはそれもなし

武隈の松はこのたびあともなし千歳を経てやわれは来つらむ

能因集『後拾遺集』雜四にも

則光朝臣の供に陸奥の国に下りて、武隈の松をよみ

侍りける

橘季通

武隈の松は二木を都人いかがと問はばみきと答へむ能因集『後拾遺集』雜四

みちのくににまかりたりけるに、野の中につねよりもおぼしき塚
 のみえけるを、人にとひければ、中將のみ墓と申すはこれがことな
 りと申しければ、中將とは誰がことぞと又とひければ、實方の御尊
 なりと申しける。いとかなしかりけり。さらぬだにもおはれにお
 ぼえけるに、しかもかれがれのすずき、ほのぼの見えわたりにて、のち
 にかたらむも、ことばなきやうにおぼえて

奈良の僧徒科の事によりて、数多みちのくにに遺されたりしに、中尊と申す
 処にてまかり逢ひて、都の物語すれば涙を流す。いとあはれなり。か
 らることは有りがたきことなり。命あらば物語にもせむと申して、「遠国述懐」
 と申すことをよみ侍りしに、

涙をば衣川にぞ流しけるふるき都を思ひいでつゝ『西行上人集』

仁和尚菩提院前南院統子内親王



一二六年生 聖壽堂菩提院

一二二病はより退下

二五九上西門院聖壽堂歌

二八九没

三 ぞりともと猶ふことをたのむかなしで山おをえぬわかれば
 同じをりつばの煙のちりけるをみて、かくな打覺え侍と申しける
 三 君がいなむかたみにすべき櫻さへ名残あらせず風さそふなり

三 言 この春は君にわかれのをしきかな花のゆくへを思ひ忘れて
 返しせよとらけたまはりて扉扇にかきてまじいける 女房六角の問

修行して遠くまかりけるをり、人の思ひ隔てたるやうなる事の侍り
 ければ

三 言 よしさらばいくへともなく山へえて中がても人へ送てられなむ

西行の足跡

